

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】楠田 悠貴

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院 (人文社会系研究科 欧米系文化研究専攻 西洋史学専門分野)

【研究題目】近世フランスにおけるイングランド共和主義の歴史・思想の受容と機能について

【研究の目的】(400字程度)

報告者の研究課題は、イングランド革命の歴史や、それにとまなう共和主義思想が、フランスにおいてどのように受容されてゆき、とりわけフランス革命・ナポレオン帝政期にどのように機能したのかについて明らかにすることである。本研究の学術的意義は、近代の画期をなすフランス革命を、イングランドの歴史が及ぼした影響という新しい視角から捉える点にある。すなわち、フランス革命史研究では、第1に、革命家たちの過去との断絶の意識が強調されてきたために、革命家たちが過去の事例を参照していた点が軽視されてきた。第2に、長らくナショナリズムの強い影響下で研究がなされてきたために、他国に参照対象が存在した事実が注目されてこなかった。この2点を背景として、多くの革命家たちがイングランドの歴史・思想に言及しているにもかかわらず、その影響は未だつまびらかでない。本研究は、これらの前提を払拭することによって、フランス革命の新しい解釈の構築を目指す。

【研究の内容・方法】(800字程度)

報告者は、2016年10月から2017年9月まで、フランス社会科学高等研究院(EHESS)のMaster2課程に留学し、フランス革命およびナポレオンの専門家として著名なパトリス・ゲニフェイ研究主任の指導を受けながら、イングランド17世紀の歴史がフランス革命にどのような影響を及ぼしたのかについて調査をおこなった。近年、レイチェル・ハマーズリーをはじめとして少しずつ個別研究が現れつつあるものの、このテーマの先行研究はとも少なく、もっぱらイングランド革命を生きた共和主義思想家たちの思想伝播を辿ってゆく「間接的影響」を扱うものが目立つ。そこで報告者は、フランス人のイングランド史それ自体への言及を収集・分析することによって、彼らがイングランドの歴史から何を学び、それがフランス革命の展開にどのような影響を及ぼしたのかという「直接的影響」に焦点を絞って研究を進めてゆくことにした。具体的には、第1に、フランス国立図書館などにおいて、アンシアン・レジーム期からナポレオン帝政期までに出版されたイングランドの歴史に関する一次史料を収集し、フランスの人々がイングランド17世紀の歴史をどれほどつよく意識していたのか、またどのように解釈してきたのかについて把握を試みた。第2に、フランス革命期には、多くの人々がイングランド革命とのアナロジーの意識を持っており、フランス革命の進展にとまなう、この意識がどのように変遷するかについて考察した。第3に、とりわけルイ16世裁判期にイングランド史への関心(アナロジー意識)の高まりが見られることが分かったので、国王裁判期のパンフレットを体系的に分析し、穏健派・急進派ごとのイングランド史をめぐる論点を整理した。第4に、フランス革命期にクロムウェルという言葉が非常に頻りに登場することに気づき、フランスにおけるクロムウェルのイメージや、その用いられ方について、フランス革命史の展開にそって分析した。

【結論・考察】(400字程度)

18世紀後半のフランスでは、ヒュームの『イングランド史』などを通して、イングランドがチャールズ1世裁判・処刑後にクロムウェルの独裁に陥ったことがよく知られていた。多くのフランス人は、革命のさなかに王権を停止した頃から、イングランド革命とのアナロジーを意識しはじめ、ルイ16世を処刑すれば「クロムウェルのような人物」が台頭してしまうと考えて、国王裁判・処刑に躊躇した。国王処刑後には、ロベスピエールからナポレオンまで様々な人々が「新しいクロムウェル」として糾弾されている。また、革命後

期には、共和主義者たちがイングランドの歴史を参考にして反革命の蓋然性について議論している。このように、「筋書きのないドラマ」として叙述されがちなフランス革命であるが、相当な数の人々が、イングランド17世紀の歴史を学びながら、自分たちの革命の展開を予測していたのである。

報告者は、「新しいクロムウェル」として糾弾された人々のニュアンスや、糾弾された頻度の違いなどについて、より一層の分析・実証が必要だと考えている。また、イングランド革命を援用してフランス革命を急進化させようとしたブリソらによるイングランド史の援用についても、今後明らかにしてゆきたい。